

〔一〕 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。解答番号は〔一〕の □ 1 から □ 13 までとする。

シモーヌ・ヴェイユ（一九〇九—一九四三）における身体は痛みと切り離すことができない。快樂とではない。痛みとである。

ヴェイユの思想の根幹には、痛みや不幸、人間の悲惨がある。痛みや苦しみは一瞬にして世界を一変させ、人間をあつとう間に支配する。不幸や苦痛の隸属を開きしようにも、その渦中にいるひとも含めて、そのダセイと暗闇ゆえにだれも不幸を見つめることができない。せいぜい虚言で繕うか、社会的秩序で守るかの応急処置しかできず、おのずと不幸と苦痛に向かわることばは虚ろなものになる。さらにいえば、不幸のうちであらゆる光をうばわれると、ひとは愛することをやめる。

ヴェイユはこの慰めのない人間の悲惨に対して虚言によってその苛烈さを曇らせようとも、社会を甲冑にしてみずからを守ろうともせず、そのまままつすぐに見つめようとした。人間の悲惨を観照すること——。この人間の本性上不可能な挑戦をヴェイユは眞空に向けられた努力とよんだ。

桎梏の闇のなかで愛すべきものもなく、魂がうちくだかれそうになりながらも眞空に向けて愛する努力をするという、目前に迫りくる不幸への心構えとでもいうべきこの主題は、時代の切迫度に比例し、亡命先のマルセイユ以降の著作でその深度を増していくた。

痛みと身体の関係性は、学生時代のヴェイユの著作にすでにゆさぶるのか。アランが主宰する哲学雑誌『リーブル・プロポ』に掲載された「知覚について、あるいはプロテウスの冒險」（一九二九）のなかで、ヴェイユはこの問題について論じている。ここでヴェイユは『オデュッセイア』に登場する変幻自在に姿を変えるプロテウスになぞらえて、身体が感覚的な刺戟によって脈絡なしに変わりうる様を描いた。

人間の身体は、大海のなかのひとつ波のごとく、世界のなかに投げこまれている。ただし波とは逆に、身体の部分のど

れかが周囲の波動にふれると、全身が震える。よって身体におよぶ事物の作用は、いうならば冷たい接触にのみ限定されはない。それはつねに各部分の統一にたいする烈しい攻撃^(b)、シンパンなのである。一握りの砂を砂山に加えるとき、わたしは手にふれた砂だけを変える。だが、私の指をねじ曲げる人間は、わたしの身体の五臓六腑にいたるまで震撼させる。したがつて、海水で浸されるこの物体に宇宙が刻みこむ運動と、わたしの全存在が反射的におこなう烈しい防御とのあいだに、共通の尺度はいつさい存在しない。（……）人間の身体のおぼえる感動はつぎつぎと継起するが、互いに似通うことがないばかりか、互いに引き継ぎ合うことすらいつさいない。あるときは獅子、あるときは木々、あるときは水というぐあいに、人間の身体は正真正銘のプロテウスである。ところで、刺戟に震えるこの身体に住まう魂にとつて、いや、より正確には身体と密接につながれている魂にとつて、この次元にある思考を神話的にあらわしてよいなら、宇宙そのものがプロテウスだといえるだろう。

暴力的に外界に曝される身体は一撃にして姿が変わる。しかも、その変化は物体が必然性のもとで変化するのとは異なり、脈絡なしに変化する。わたしたちが日常的に体験するように、実際にはつかまれていないのに胃をぐつとつかまれたかのような感覚をおぼえたり、存在していないものに恐怖をおぼえて鳥肌がたつたり、痛みの感覚的な印象は空間も時間も軽々と飛び越え、世界を一変させる。手で薔薇の棘を触つたにもかかわらず、棘に直接触れた手の触覚をつうじて刺戟が身体に伝わるのではない。いかなる感官も空間も時間も経由せずに、一撃で身体全体を脅かしうる。棘に触れたのは手なのに目をつむる。棘に触れたとたんに薔薇の芳しい香りが消える。棘と接触していないう感覚に変化が起こる。⁽²⁾かくて鏡がいかなる状況でも薔薇なら薔薇でおなじものを映すのに対し、身体は感覚的な刺戟に曝され、脈絡なしに変化するプロテウスとなる。

この論考の結論としては、人間は外界に曝される身体をもつ生でありながらも、想像力とゴセイをむすびつける知覚のはたらきが指摘され、労働が両者をむすぶ媒介となることで、プロテウスがめでたく鎮められて終わる。しかし、プロテウスはしぶとい。感覚的な刺戟が身体にもたらす感覚印象は想像力とむすびつきやすく、宇宙の必然性や法則性をやすやすと無に帰し、

たんなる感覚印象を宇宙と取り違えてしまう。だれにとつても、わたしがこの身体が感じたことは代替のきかない真理として刻みこまれてしまう。このプロテウスの危険性をよく知るヴェイユは、外界に曝される身体の自動的で流動的な性質につよい関心をもちつづけた。

一九三三年から三四年にヴェイユがロアンヌで担当したクラスの講義ノート『シモーヌ・ヴェイユの哲学講義』をみると、身体と反射の関係が入念に検討されていることがわかる。（略）

さらにこの検討は、社会のなかで反射を利用した装置へとすすんでいく。成績表、地位、勲章などがそうだ。社会が付与し、同時に社会の構成員が反射的に読みこむ意味はさまざまなる記号となり、それらにしたがつてわたしたちは行動する。記号に反射的に応え、また記号を生みだす集合体はおなじみのプラトンの巨獸である（『国家』493a-b）。巨獸とは自分のお気に入りを正しい、美しい、善いとよび、お気に入りゆえに流動的な価値観によつて社会を築きあげる大衆の意見である。くわえてその大衆を支えるのは、巨獸を馴致するための術にすぎないものを叡智とよぶソフィストであり教育者である。かれらによつてたんなる馴致法が人類の叡智として脈々と伝達され、受け継がれ、歴史化する。しかし実のところ、だれも善や真理そのものを見らず、問う氣すらない。

ヴェイユのプロテウスと巨獸との闘いは最後までもつれこむ。ヴェイユの死後刊行された『ギリシアの泉』（一九五三）所収の「プラトンにおける神」にこの闘いへのひとつつの結論をみいだせる。「プラトンにおける神」は一九四二年前後にヴェイユがマルセイユとニューヨークで亡命生活を送るなかで執筆された。だれもが迫りくる危機を感じていたはずだが言語化できず、世界が混迷のうちにあえいでいた時期と重なる。

「プラトンにおける神」はプラトンが神秘家であるというヴェイユの見解を明らかにした作品として知られる。冒頭、ヴェイユはギリシアの特徴をふたつ提示する。ひとつは想起説である。かつて人間は神の子であったが、地上にあつては超自然的真理を忘却し、天にいたころの記憶をとりもどそうと渴きにあえいでいること。もうひとつは、「善い樹はみな善い実を結び、悪しき樹は惡しき実を結ぶ」（マタイ7・17-18）とおなじく、善悪が神との接触・非接触に厳密にイキヨする点である。それ

ゆえ、人間社会からは人間社会に関わることしか出来しない。人間社会から超自然的なもの、非人格的なもの（美・善）への転回を果たさない限り、いかなる恩寵もおとずれることになる。ヴェイユはギリシアのこうした峻厳な義しさを重要視していた。

さて、ヴェイユのプロテウスと巨獣との闘いにもどると、ヴェイユは、プロテウスが自分の身体に関わることしか知らないように、また巨獣が自分の好き嫌いしか知らないように、人間が人間に関わることだけに限定されて生きている様を『国家』の洞窟の比喩をもちいてこう説明する。洞窟内に捕縛され、壁に映る人工物を実在だと信じる囚人たちは、かれらの目のまえに怖ろしげな形をしたものが通過すると苦しい思いをするが、「かれらの悲惨の本質そのものの、つまり、通り過ぎる影に完全に依存しているということ、さらにそれらの影を実在だと誤つて思いこんでいるということ、これらについてはかれらは夢想だにしないのだ」（『ギリシアの泉』富原眞弓訳、みすず書房、一九九八年、一四九頁）。

影や見かけを真理と誤つて思いこんでいるのは、プロテウスも巨獣も囚人と同様である。三者とも目のまえに与えられた影や見かけに囚われ、みずから隸属を知らない。それゆえヴェイユはこうのべる。「われわれは□のうちに生まれ、生きている。われわれは動かない。さまざまな表象が眼前を通過し、われわれはこれらを体験する。われわれはなにひとつ選ばない」（『ギリシアの泉』、一四八頁）。

ヴェイユのいうとおりだ。プロテウスも巨獣も囚人も、目のまえを通り過ぎる影や見かけに反応しながら戯れに変化し姿を変えるが、実のところ、その場から動いていない。動いて捕縛されていることを知るには、これまでと異なる仕方をとらねばならない。身体をぐるりと転回させること（それも眼だけではなく全身を転回させること）、目のまえになにも与えられなくとも、すなわち、対象もなく暗闇であつても歩みをすすめること（純粹な意志）、これまで影や見かけを真理だと思い込ませていた身体から離脱し、真理そのものに宇宙の中心点を移すこと。身体からの離脱は肉の死であり魂の根源回帰となろう。ヴェイユのプロテウスと巨獣との闘いは、人間の悲惨をへて、死をめぐる根源への回帰という円環にいきつく。

(略) ヴェイユは真理が裸性にケンゲンすることに着目する。裸性とは死である。家族、他者の意見、所有物など自分に關する

わるものすべてとの断絶である。完全なる自己放棄の次元は非人格的なものとなり、万人に公平な次元といえよう。そこには敵も味方もない。要するに無力なのである。⁽⁶⁾ 非人格的なものとは、力をふるうこととはまったく反対に、みずからを虚しくすることなのである。

（佐藤紀子「人間の悲惨を観照する——シモーヌ・ヴェイユの身体論」による。ただし本文の一部と見出しを省略した）

※シモーヌ・ヴェイユ……フランスの哲学者

※アラン……ヴェイユの学生時代の師、思想家。『幸福論』などの著作がある

※『オデュッセイア』……古代ギリシアの長編叙事詩

※プロテウス……ギリシア神話に登場する海神。変身の能力を持つ

問一 二重傍線部①～⑤の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

- | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 | 1 |
| 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 |
| 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 | 3 |
| 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 | 4 |
| 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 |
| 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 | 6 |
| 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 | 7 |
- (a) 1 ダラクした生活
2 道をダコウする
3 ダキョウの産物
4 ダミンをむさぼる
- (b) 1 クッシン運動
2 権利をシンガイされる
3 シンソウ心理
4 シンシツで休む
- (c) 1 城をシユゴする
2 ゴカクの実力
3 ゴカイを招く
4 カクゴを決める
- (d) 1 法令にジュンキョする
2 ザツキヨビル
3 キヨドウ不審
4 キヨリを測る
- (e) 1 ケンジツに生きる
2 特產品のケンジョウ
3 レンズをケンマする
4 ケンビ鏡を買う

問二 傍線部①の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 苦痛が人間の価値観を一変させてしまう状況
- 2 光も空気も届かない暗闇に備えるという状況
- 3 宇宙空間では生命の維持が難しいという状況
- 4 人間にとつて不可能な行いを強いられる状況

問三 空欄 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 決算
- 2 停滞
- 3 萌芽
- 4 挫折

問四 傍線部②のようについて理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 8
1 この世に存在する様々な物体と同じく、人間の身体も必然性のもとに複数の反応を引き起こすものだから
2 物体に宇宙が刻みこむ運動と人間の身体に与えられた刺戟に対する反応は、決して尺度を共有しないから
3 鏡に反射した出来事は架空の現象に過ぎないものだが、人間の身体に加えられた力は疑いようがないから
4 身体の各部分に与えられる宇宙からの攻撃は、機械的な法則によって一律に人間を変化させるものだから

問五 傍線部③の具体例として、あてはまらないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 9
1 備忘録 2 認可状 3 免許証 4 表彰状

問六 傍線部④の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 10
1 人間社会の中にある限りは、絶対に神の恩寵は訪れないということ
2 人間社会から美・善への転回を果たすために恩寵があるということ
3 神の子である人間が、真理を取り戻そうと努力を続けるということ
4 神と接触せずとも、人間はその能力で善悪を判断できるということ

問七 傍線部⑤の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 11
1 自身を洞窟に捕縛した主体が国家であることを夢にも思わない
2 影が通過することによって苦痛が生じる状況を想像すらしない
3 通り過ぎる影が真理であればいいのにと常に希望を抱いている
4 壁に映る影が実在そのものではないということに考えも及ばない

問八

空欄 12

に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

12

- 1 神秘性 2 受動性 3 協調性 4 積極性

問九

傍線部⑥の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

13

- 1 人工物は見かけによつて人格性を伴うが、そのような虚飾にとらわれず、裸のままを愛することで真理に到達できる
とヴェイユは提案している

- 2 巨獸のように圧倒的な力で人々を捕縛するのではなく、人間の悲惨に同情し、他者へ公平に接することが真理である
とヴェイユは主張している

- 3 真理の正体とは、たとえ目前がまつたくの暗闇であつても動じずに、敵や味方という争いの概念から離脱することだとヴェイユは分析している

- 4 人間が真理を知るためには、自分に関わるものすべて放棄する、いわば肉体の死に近いあり方を目指す必要がある
とヴェイユは示唆している

〔二〕 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。解答番号は〔一〕の □ 1 から □ 8 までとする。

(以下は、念佛の安心について僧侶から尋ねられた一遍上人が、その返事として書き送った手紙文である)

それ、念佛の行者用^①心のこと、しめすべきよし承り候ふ。南無阿弥陀仏と申す外^{はが}、さらに用心もなく、この外にまた示すべき安心もなし。諸々の智者達の様々に立ちおかるる法要どもの侍るも、皆諸惑^②に対したる仮初^{かりそめ}の要文^{ようもん}なり。されば、念佛の行者は、かやうの事をも打ち捨てて念佛すべし。むかし、空也上人へ、ある人、念佛はいかが申すべきやと問ひければ、「捨てこそ」とばかりにて、なにとも仰せられずと、西行法師^④の撰集抄に載せられたり。これ誠に金言なり。念佛の行者は智恵をも愚痴をも捨て、善惡の境界をもすて、貴賤高下の道理をもすて、地獄をおそる心をもすて、極楽を願ふ心をもすて、また諸宗の悟りをもすて、一切の事をすてて申す念佛こそ、弥陀超世の本願にもつともかなひ候へ。^⑤かやうに打ちあげ打ちあげとなふれば、仏もなく我もなく、ましてこの内に兎角^{とかく}の道理もなし。善惡の境界、皆淨土なり。外に求むべからず、厭ふべからず。よろづ生としいけるもの、山河草木、ふく風たつ浪の音までも、念佛ならずといふことなし。^⑥人はかり超世の願に預かるにあらず。またかくのごとく愚老^⑦が申す事も意得にくく候はば、意得にくきにまかせて愚老が申す事をも打ち捨て、何ともかともあてがひはからずして、本願に任せて念佛したまふべし。念佛は安心して申すも、安心せずして申すも、他力超世の本願にたがふ事なし。弥陀の本願に欠けたる事もなく、あまれることもなし。この外にさのみ何事をか用心して申すただ愚かなる者の心に立ちかへりて念佛したまふべし。南無阿弥陀仏。

(『一遍上人語録』による)

※空也上人……平安時代中期の僧

問一 傍線部①の意味として、最も適切なものを次のの中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 注意を怠らないこと 2 気を回すこと 3 心がること 4 警戒すること

問二 傍線部②の意味として、最も適切なものを次のの中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 心を仏道から逸らせるもの 2 諸々の信条や信念
「論語」でいわれる不惑 4 多くの迷いや悩み

問三 傍線部③の内容として、最も適切なものを次のの中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 仏の教えだけは大切に護持し、地獄への恐れや極楽への願いや他宗派の教えは全て捨て去ること
2 自分の知恵や愚痴を捨てるだけでなく、仏の教えも悟りも崇める心も全て捨て去ること
3 念仏も捨て、仏の教えも捨て、仏教諸派の説く悟りをも捨てて、一切が虚無であると悟ること
4 自分の生命に対する執着を捨てて、師に対しても全てをなげうつて仏も我もない境地を体得すること

問四 傍線部④による歌集として、最も適切なものを次のの中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 鶴衣 2 山家集 3 金槐和歌集 4 去来抄

問五 傍線部⑤の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 こんなに率直に自分の心を吐露しながら念佛を唱えれば
- 2 こんなにひたむきに声を張り上げて念佛を唱えれば
- 3 このように途切れ途切れにでも念佛を唱えれば
- 4 このように派手に目立つ状態で念佛を唱えれば

問六 傍線部⑥の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 ほんの一握りの人だけが念佛の救いを得られるわけではない
- 2 人だけが阿弥陀仏の本願にあずかることができない
- 3 人だけが世俗を超しようと願っているわけではない
- 4 人だけが阿弥陀仏の超俗的な恩恵を受けるわけではない

問七 傍線部⑦の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 老いた自分を指す謙遜の一人称を表す語
- 2 愚かな老人たちを意味する語
- 3 仏道に通じた先達を指示する語
- 4 愚かなまま年を重ねたものを揶揄する語

問八 空欄 に入るものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 べし
- 2 べく
- 3 べき
- 4 べかる

〔三〕 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。解答番号は〔三〕の □ 1 から □ 8 までとする。

左川ちかの名前をはじめて知ったのは大学生のこと。北園克衛の視覚詩を研究している友人に教えてもらつて、図書館でいくつかの詩篇を読んだとおもう。青空の、果樹園の、長い夜の、そして何よりも夏に □ く増殖する緑の、目眩がするようなつよい色彩感覚に打たれた。

のこされた写真を見るとき、彼女がかけている丸い黒縁眼鏡はどうにも印象的だけれども、とくに陽射しのつよい夏には目を痛めて眼科に通うこともあつたという。

あれはわたしがまだ四歳か五歳だったある夜、家族と車でどこかから帰る途中だつたとおもうが、夜空に満月が七つ、すこしづつそれながら浮かんでいた。見えたものをそのまま両親につたえたときの、自分の声を不思議なほどなまなましくおぼえている。すぐにちいさな乱視用の眼鏡をつくり、左右の視力差をすこしでも矯正するためにアイパッチというシールで左目を覆つてしまつた。

毎朝、母がそのシールに黒いサインペンで目の絵を描いてくれた。ときには弟がおもしろ半分に描いてくれることもあつたが、まだ幼いので下手だった。とにかく数年のあいだ、わたしは母や弟が描いた「左目」で世界を見ていたわけだ。まばたきせず、目をつむつてもひらきっぱなしの左目で。いま、眼鏡やコンタクトレンズのおかげで生活にはこまらないけれど、片目ずつ別々にものを見ているような感覚はなかなか抜けない。

風景をはつきり「見る」ことが最初からむずかしかつたわたしにとつて、ぶあつい眼鏡をかけた左川ちかの姿はどこか慕わしく、「季節のモノクル」（「モノクル」は片眼鏡のこと）というタイトルの詩があつたり、「視力」や目にかかるフレーズがたびたび登場したりするのもおもしろかった。

(3) 眼鏡をかけてゐるといふことは物をはつきり見るためではなかつた。つまり顔の幅だけで物を見てゐると、現はれてゐる

事柄だけに錯覚を感じそのものがどんな拡がりをもつてゐるのか、どんなふうに浸潤してゆくかを知る前に現象それ自身の火花にごまかされてしまふ場合が多い。

「樹間をゆくとき」

左川ちかにとつての眼鏡は、「現象それ自身の火花」からある意味では目を守り、現象を精神にふかく沈めたところから見るためのものだつた。もちろん、この眼鏡はひとによつては眼鏡ではない別の何かだらうし、詩人の目、とシンプルに言いかえてもかまわないかもしない。彼女はあの黒々とした眼鏡で「果樹園がまんなかから裂けてしまふのを」（「雲のやうに」）、「真昼の裸の光のなかでのみ現実は崩壊する」（「夢」）のを見た。まぶしくてまぶしくて仕方のない、この真昼の光。果樹園の裂け目から露出する、この世界の「地肌」の□1さ。

さまざまな色彩がくりだされるなかで、「白」だけは「白い」というかたちではなく「白く」と動詞にかかる用法が目立つことにふと気づく。^④「白」は静ではなく動なのだ。まぶしさの向こう側で進行する爛れた崩壊を、わたしもまた自分の眼鏡で見たいとつよくおもう。

視力のなかの街は夢がまはるやうに開いたり閉ぢたりする

それらをめぐつて彼らはおそろしい勢で崩れかかる

私は人に捨てられた

一枚の硝子かがやき樹を距つむしろひとに捨ててしは心

「縁」

※
山中智恵子『紡錘』

ある年の初夏、目に入つてくる木々の緑が急にものすごくあざやかになつた。映画「オズの魔法使」で場面がカラーになる瞬間のような、それは決定的なあざやかさだつた。たぶん、遅かれ早かれだれもがその瞬間を体験するんじやないかといまはおもつてゐるが、わたしにとつては二十七歳の初夏だつた。新緑の色彩に打たれると同時に、ああ自分も友人も家族もみんな死ぬんだなと急にわかつた。もちろん、ひとは死ぬ。でも知識としてではなくて、「死ぬ」ということが眼球をつらぬいて全身の血に回つた氣がした。このままならない世界で、ままならない身体と心を生き、死んでいくのだと。ぐんぐんと葉を繁らせる木々の緑は、生きることと死ぬことに両端からひっぱられてはち切れた世界の色彩のようにおもえた。

「人に捨てられた」と「ひとに捨てしは心」、真逆のことを言つてゐるようでありながら、同じ種類の潔癖な翳りかげを帶びている。「人」「ひと」は特定のだれかではなくて、もつと純粹に、人間そのものではないかともおもつた。「人に」「ひと」のそれぞれの「に」は英語の前置詞に翻訳しづらい微妙なニュアンスをまとつていて、そのぶん「捨てる」という言葉の切実さが苛烈にせまつてくる。この孤独の深さが、左川ちかのどの詩にもある。心のいちばん奥の部屋で大切に読みかえしたい。

（大森静佳「眼鏡をかけるひとへ」による）

※山中智恵子……日本の歌人（一九二五～二〇〇六）

- 問一 空欄 1 (二箇所ある)に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。
- | | | | |
|---------|---------|---------|---------|
| 1 みずみずし | 2 まがまがし | 3 すがすがし | 4 ものさびし |
|---------|---------|---------|---------|

問二 傍線部①の理由として、最も適切なものを次のの中から選び、その番号をマークせよ。

2

- 1 片目だけですごす数年間の契機となつた瞬間だから
- 2 物の見え方が他人と違うことを面白く思つたから
- 3 自分の見え方を伝えれば叱られるとわかつたから
- 4 左目を使って外の景色を見た最後の瞬間だつたから

問三 傍線部②の説明として、最も適切なものを次のの中から選び、その番号をマークせよ。

3

- 1 視力を失つた左目に代わり、家族の描く目が「わたし」を支えていたということ
- 2 絵に描かれた左目はつむることができず、休む間もなく世界を見ていたということ
- 3 家族の描いた左目には特別な力があり、ほんものの目のよう機能したということ
- 4 隠されていた左目は、右目の見る現実とはべつのものを見続けていたということ

問四 傍線部③の説明として、最も適切なものを次のの中から選び、その番号をマークせよ。

4

- 1 眼鏡をかけることにより、裸眼では見ることのできないような幻影が見えるということ
- 2 眼鏡に色が入つてゐるので、普段では見ることのできない色彩があらわれること
- 3 眼鏡が対象とのあいだの隔たりとなるので、直接の視覚に惑わされずにすむということ
- 4 度の強い眼鏡をかけると、近くの物の輪郭は曖昧となり、鋭さが減じられるということ

問五 傍線部④の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

- 1 左川ちかの作品においては、「白」は副詞ではなく形容詞として用いられることが多い
- 2 左川ちかの「白」は光のまぶしさを象徴し、かつ光は崩壊と死を予感させるものである
- 3 左川ちかの詩において「白」には躍動感があり、おういつ横溢する生命の豊かさをよく捉えている
- 4 左川ちかの色彩感覚において、色たちが打ち消し合ったような「白」は別格の存在である

問六 傍線部⑤の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

- 1 モノクロの世界に色がつくような解像度の変化は、視力の弱い「わたし」には鮮烈すぎるものだった
- 2 初夏の新緑のあざやかさは生と死と両方の横溢を思わせて、直感的な認識を「わたし」にもたらした
- 3 新緑のあざやかさと光が崩壊を想起させ、左川ちかの書いた詩の解釈が「わたし」にもあきらかになつた
- 4 山中智恵子や左川ちかが樹木のあざやかさに託したものを、「わたし」も歌わなければならぬと思つた

問七 傍線部⑥の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 山中智恵子の短歌は、窓ガラスで隔てた樹の下に立つ相手との別れを詠じた点に潔さが感じられる
- 2 左川ちかの「緑」は、崩壊する街の幻影と捨て子としての自分を描いており、その対比に陰影がある
- 3 山中智恵子と左川ちかの「捨てる」という言葉からは、人というものとの断絶の感覚が読み取れる
- 4 「人に」「ひとに」の「に」はどちらも曖昧で、その分「捨てる」の語の非道さを引き立たせている

8

問八 本文の内容と合致するものとして、最も適切なものを次の 中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 北園克衛の詩と左川ちかの詩は、視覚世界を自明のものとしては捉えていない点が共通している
- 2 風景をうまく見ることのできなかつた「わたし」は、眼鏡をかけた左川ちかに共感を抱いてきた
- 3 現象を直視するのではなく、精神に浸潤させた経験がなければ、優れた詩を書くことはできない
- 4 山中智恵子と左川ちかは、作品が英語に翻訳されるときのことまでを考慮しながら制作を行つた

(以
下
余
白)